

嵯峨本『史記』の書誌的考察

コアキモト, ダン / 小秋元, 段 / KOAKIMOTO, Dan

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

109

(終了ページ / End Page)

141

(発行年 / Year)

2004-03-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020768>

嵯峨本『史記』の書誌的考察

小秋元 段

はじめに

近世初頭、嵯峨本と称される一群の書が刊行された。これらは雲母刷り表紙や色替わり料紙を用いた豪華な装訂に、光悦流といわれる独特の書風の文字を持つことを特徴とする。現在、嵯峨本と認定される書は、『徒然草』¹⁾『伊勢物語』¹⁾「観世流謡本」などの国書がすべてであるが、このほかにも「伝嵯峨本」と呼ばれる古活字版の『史記』がある。

『史記』に冠された伝嵯峨本の称は、現存本に嵯峨本と同類の表紙が使われている本や、光悦書風の刷題簽を押す本があることなどにちなむものである。確かに、内閣文庫本（別二六／一）・蓬左文庫本の表紙や、同じく内閣文庫本・東洋文庫本（三／B／c／一）の題簽は、嵯峨本としての面目をよく伝えている。また、後述するように、角倉素庵が嵯峨の地で『史記』を開版したことを窺うに足る資料もあることから、嵯峨において『史記』が刊行されたことは事実と認めてよい。よって、本稿では「伝嵯峨本」の「伝」をとり、これを「嵯峨本」と称することにしたい。²⁾

嵯峨本の刊行は、京都嵯峨の地にあつて巨富を築いた角倉了以の子息、素庵によつて主導されたと考えられてい

る。⁽³⁾ 慶長期の嵯峨はわが国の出版事業の中心地であつて、和漢様々の書がここで開版された。素庵の出版活動には多くの人材が関与していたらしい。五十川了庵・下村生蔵・下村時房・医徳堂守三・梅寿などの古活字版の印行者たちは、いずれも角倉家と深いつながりを持つ人々であつた。

ところが、嵯峨で刊行されたと考えられる本の中で、素庵その人の名を刊記に記すものはない。素庵の名が出版と結びついて現れるのは、「羅山先生年譜」「大和事始」「弁疑書目録」などの、後代の資料においてである。文献資料の上で素庵の出版事業を説明することはなかなか難しく、従来、嵯峨本の製作環境をめぐる論説が、ある程度の推論を織り交ぜなければならなかつたのは、このことに起因している。しかし、ここにとりあげる嵯峨本『史記』は、素庵によつて刊行されたことがほぼ確実な本である。しかも、現存本が比較的多く、これらを個々に調査することにより、素庵の出版事業の一端が解明される可能性がある。『史記』の刊行は慶長の前半、嵯峨本の「観世流謡本」や『伊勢物語』などが刊行される前の出来事である。『史記』の刊行を探ることは、嵯峨における国書刊行の経緯を明らかにすることにもつながるだろう。

本稿は、嵯峨本『史記』刊行をめぐる資史料の確認、現存本の整理といった基礎的作業を中心に行い、その上で嵯峨における出版事業の一斑に光をあててみようとするものである。すでに和田維四郎氏『嵯峨本考』（一九一六年）、川瀬一馬氏『嵯峨本図考』（一誠堂書店、一九三二年）、同氏『古活字版之研究』（安田文庫、一九三七年）などの先駆的研究により紹介された資料や、指摘された事実が多い。本稿はそれを遙かに超える材料を持つものではないが、個々の素材を再検討することにより、若干の新知見を加え、嵯峨本誕生の歴史を見通すことができると考える。

一、刊行者と刊年

はじめに嵯峨本『史記』の刊行者と刊年について、資史料の伝えるところを確認しておこう。

まずは刊行者の問題から。角倉素庵（本姓吉田氏。通称与一、諱玄之）が『史記』を開版したことを早くに伝える文献として、『羅山林先生集』所収「羅山先生年譜」がある。その慶長四年（一五九九）の条には、次のような記述がある。

先生十七歳 頃年借_レ文選六臣註_ヲ於永雄_ニ、毎日読_ム一卷_ヲ、六旬_{ニシテ}而畢_ル、又_タ借_ル前後漢書_ヲ於永雄_ニ、数月
一_ニ周覽_ス之_{レヲ}、其_ノ後吉田玄之新_ク刻_シ史記_ヲ於嵯峨_ニ、先生求_ニ一部_ヲ而儼_シ、旧点本_ヲ於東福寺_ノ僧_ニ手_ラ自_ラ写_レ
之_{レヲ}、彼_ノ僧深_ク秘_シ之_{レヲ}不_レ許_ニ輒_ク借_レ之_{レヲ}、先_ツ附_ス一冊_ヲ乃_シ点_シ了_テ返_レ之_ヲ、其_ノ次逐_レ卷_ヲ亦_タ然_リ、奚奴
来往数十回_{ニシテ}而期月終_レ功_ヲ、へ此_ノ本罹_ル丁_ノ西_ノ之災_ニ、

慶長四年、羅山は六臣注『文選』を、ついで『漢書』『後漢書』を建仁寺の英甫永雄に借り、これを読破した。その後、彼は『史記』すべてに加点を行うのであるが、そのとき用いた本が嵯峨における素庵の新刻本だったというのである。

この本は明暦三年丁酉（一六五七）の江戸の大火で消失した。だが、林家には素庵が『史記』を刊行したという確かな伝が存在したらしく、「羅山先生年譜」を撰じた羅山の三男鷺峰は、別のところでも素庵所刊の『史記』について触れている。寛文八年（一六六八）八月一日、鷺峰は家蔵する「嵯峨板」の『史記』に朱句を施す功成った島周

(樋口采清)に、家蔵の『史記』一本(島周がこれまで参照に用いた本)を授けるとして跋語を寄せた(『鶯峰先生林学士文集』卷九八「書下授島周二史記ノ後上」)。その中に、

余家ニ蔵ス遷史数部ヲ、其ノ中吉田氏カ所刊スル嵯峨板ノ大本有リ訓点ニ、未レタ違アラ加レニ朱ヲ、丁未ノ冬侍者島周有リ一覽ノ志ニ、余為レニ試ニ彼カ力ヲ、乃命レシテ之ニ就テ此ノ本ニ写サシム朱句ヲ嵯峨本ニ、彼レ候ニ史館ニ之暇勤テ而不レ怠ラ、至テ今年仲秋ニ全部功成ル、

とあって、島周に朱句を施すことを命じた本が、「嵯峨板」で「吉田氏」の所刊本であったことを明記している。現在、内閣文庫に蔵される昌平坂学問所旧蔵本(二七九ノ一八。羅山の「江雲渭樹」印を捺す)が、島周による書入本ではないかと筆者は推測しているが、もしそうだとすると、ここで嵯峨板と称されたのは、古活字第一種本の『史記』ということになる。

これに次いで素庵による『史記』開版を伝える文献に、貝原好古の『大和事始』(天和三年へ一六八三序)がある。同書卷四の三九「印板書物を板行する事也」には、

亦角倉与市太秦の僧に。史記及謡の本を開版せしむ。嵯峨本と云是也。

と記されている。角倉与市、即ち素庵が太秦の僧に嵯峨本と呼ばれる『史記』と謡本とを刊行させたというのである。太秦の僧については嵯峨の天龍寺・臨川寺周辺に室町以来居住し、出版事業に携わっていた僧俗の集団に関わる人物を指すのではないかとの岡崎久司氏の推論がある。また、『史記』とともに名をあげられた謡本については、内閣文

庫本『史記』（別二六／一）の表紙裏張に反古が見える慶長古活字中本を指すのではないかという説がある。⁽⁶⁾しかし、『大和事始』の記述は素庵の開版書の代表として大冊の『史記』と美しい「観世流謡本」の二書をあげたものかもしれない、判断は難しい。

つづいて、素庵による『史記』刊行の時期について検討する。第一種本の刊行時期については、これまで慶長四年説、慶長九年頃説、慶長一一年以前説の三説が提示されている。刊行を最も早くとする慶長四年説は「羅山先生年譜」にもとづくもので、羅山研究の立場から唱えられ、書誌学の側からも森上修氏が支持されている。⁽⁷⁾しかし、林屋辰三郎氏が注意を促されているように、「羅山先生年譜」の『史記』加点の条は、慶長四年の『文選』『漢書』『後漢書』借覧のあとに「其後」のこととして合叙されたものである。実際には素庵による『史記』刊行と羅山の加点は、慶長四年よりも後のことであった可能性もある。⁽⁸⁾

そこで林屋氏は慶長九年頃説を唱えられたのだが、それは慶長九年の羅山の「既見書目」（「羅山先生年譜」慶長九年条）に『史記』の名があがっていることを第一の論拠とする。つまり、林屋氏は「既見書目」中の『史記』が、素庵の新刻本にあたるのだらうと推測されたのである。また、氏は舟橋秀賢の『慶長日件録』慶長一二年一月二七日条に、

次新板史記全本拝領、年来所望之処、無力之故不感得、毎度事欠之処拝領、満足大慶々々、

とあるのを引かれている。そして、ここで秀賢が新版の『史記』を「年来所望」と述べていることから、その刊行は慶長一二年より三年以上遡る慶長九年頃ではなかったかと、自身の考えを補強された。⁽⁹⁾

慶長一一年以前説は川瀬一馬氏によって提示された。これは成實堂文庫本（四冊本）巻三二の巻末に、

慶長十一丁未秋八月以東福善惠軒之本新加朱墨倭点者也、

との識語があるのにもとづくもので、刊行の下限によつた慎重な見解である。これと同じ識語が栗田文庫本にもあることが指摘されており、⁽¹⁰⁾さらに同様の識語が台北国立中央図書館本（古活字第三種本）にもある（慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵マイクロフィルムによる）。また、栗田文庫本・台北国立中央図書館本・東京大学総合図書館本（古活字第三種本。A〇〇／五八九八）の巻六六の巻末には、慶長一三年の年紀を持つ識語がある。⁽¹¹⁾これらはいずれも東福寺善惠軒の本を以て加点を行つたという内容だが、これらの伝本では、善惠軒本によつて加点されたある一本をもとに加点がなされたものと思われる。従つて、成筭堂文庫本・栗田文庫本・台北国立中央図書館本・東京大学総合図書館本のすべてが慶長一一年から一三年にかけて加点されたとは限らない。しかし、最初に加点された本は確かに慶長一一年から慶長一三年にかけて加点されたはずだから（そして、それは時期的に見て、おそらく古活字版の『史記』に加点したのだろう）、『史記』の刊行を同年以前とする説は誤らないと思われる。⁽¹²⁾

さて、嵯峨本『史記』の刊行年時を特定する際、『言経卿記』に見逃しがたい記事があることは、かつて小文で触れた。⁽¹³⁾『言経卿記』慶長八年二月二〇日条には、次のような記事がある。

一、内蔵頭史記全五十冊取寄了、嵯峨二有之云々、残而四冊出来次第可送之由申了、良子五十文渡了、

内蔵頭とは山科言経の息言経のこと。この日、言経は五〇冊本の『史記』を嵯峨より取り寄せた。嵯峨にあったことといい、五〇冊本であったことといい（原装の古活字版『史記』は五〇冊仕立てである）、これが古活字版―後に見てゆくように、その第一種本―の『史記』であったことは間違いない。この記事によつて我々は、『史記』が嵯峨に

において刊行されたこと、そして、その刊行時期として慶長八年という年が指標になることを知るのである。

ここでさらに言経は、五〇冊の『史記』のうち、残り四冊が出来次第送られる手はずになっていたことを記している。これはどのような事情によるのだろうか。素直に考えれば、この『史記』が刊行途中のものであって、この時点で最後の四冊がまだ仕上がっていないと解せそうである。しかし、古活字本の場合、後述するように印刷・製本方法の問題から、不足の冊を後に増刷して補う措置がとられることもあった。出来次第送られる四冊とは、そうした理由によって刷り増されるものであった可能性もある。この二つの考え方のうち、前者をとるならば、慶長八年一月はまさに嵯峨本『史記』の刊行のまった中であったということになる。後者をとるならば、『史記』は慶長八年一月以前にすでに刊行を終え、このときは補修版の頒布を前にしていた時期ということになる。いずれをとるかにより、刊行時期の推定が多少前後するが、このことは後に詳しく触れることにしたい。

最後に、これは少し後の記録となるが、『舜旧記』慶長一二年五月一四日条にも、

史記五十冊、良子百目令持了、

とあるのをあげておく。梵舜が入手した『史記』は「五十冊」とあることから、古活字版だったと思われる。「良子百目」とあるのは、『言経卿記』に『史記』の価格を「良子五十文」として、右傍に「百」と小書しているのと対応する。百匁というのが『史記』の相場だったのだろうか。

二、版種と現存本

川瀬一馬氏は古活字版の『史記』を、版式に従って三種に分類された¹⁴。第一種本は八行の有界本、第二種本は八行の無界本、第三種本は九行の無界本である(図一〇三)。ただし、各種とも「年表」にあたる巻は九行有界)。

このうち、第一種本が最も先行することは、川瀬氏も指摘されている。氏は第一種本を慶長一一年以前刊、第二種・第三種本を慶長元和中刊とされた¹⁵。これに付け加えれば、第一種本には誤植を切り貼り訂正した箇所が所々指摘でき、その訂正箇所が他の二種では正しく印出されていることから、第一種本が先行することが窺える。

次に、第二種本は第一種本と同じ八行本ながら、概ね別の活字を用いるようである。ただし、書風は第一種本のものによく似ており、一部に第一種本の活字が襲用されている。このほか、川瀬氏も指摘されるように、京都大学附属図書館本(谷村一太郎氏旧蔵)は所謂光悦書風の刷題簽を持つが、これは第一種本の内閣文庫本(別二六/一)や東洋文庫本(三/B/c/一)のものと同版である¹⁶。以て、第一種本との関係が推測されるだろう。

また、第二種本には聊か粗末な、肌色をした原表紙を有する本が複数存在する(大東急記念文庫本へ二二/四〇/五七)・慶応義塾大学図書館本へ一七九/五四/一)・成篁堂文庫本へ一五冊本)のほか、第一種本である内閣文庫本(別二六/一)と大東急記念文庫本(三三/一〇/五五六)に補配された第二種本¹⁷。これらは一見すると後補表紙と見誤りかねないが、複数の伝本に同表紙が存することから、原装表紙と認められる¹⁷。実は雅致に欠けるこの表紙は、嵯峨本所用の雲母刷表紙の下地に用いられるものと同じである。嵯峨本では普通、この上に雲母刷文様を施した表皮を重ねるようである。雲母刷表紙を持った嵯峨本で表皮に傷のある本に出会うと、こうした肌色の下地を見ることが出来る。このことは第二種本も、第一種本と同じ嵯峨の工房で製作されたことを物語っているよう。

第一種本・第二種本が毎半葉八行であるのに対し、第三種本は九行とする。この点からも、第三種本の後出性を窺うことができるだろう。活字は第一種本のものとも、第二種本のものとも異なる。しかし、第三種本も第一種本・第二種本同様、嵯峨の工房で刊行されたものらしい。というのも、東北大学附属図書館蔵の第三種本は一三冊の合綴本ながら、原装の茶色空押雷文繫蓮華唐草文様表紙をとどめ、この表紙が色違いながら、第一種本の京都府立総合資料館本（こちらは丹色）にも用いられているからである。恐らく、両者の製作環境は同じだったのだろう。従って、三種の古活字版『史記』はいずれも嵯峨で刊行されたものと考えられる。従来、嵯峨本『史記』というと、雲母刷表紙や光悦風の題簽を持つ本の殆どが属する第一種本を指していた。しかし、第二種本・第三種本も嵯峨の地で刊行されたのが実相であったことに注意しておこう。

つづいて現存本の一覧を左に掲げる。

第一種本

- 東洋文庫蔵 五〇冊 (三/B/c/一)
 東洋文庫蔵 五〇冊 (三/A/h/一三)
 東洋文庫蔵 四九冊 欠卷一〇二 (三/A/h/六)
 内閣文庫蔵 五〇冊 (二七九/一八)
 内閣文庫蔵 四九冊 卷一・八三―九二補配第二種本 (別二六/一)
 東北大学図書館蔵 五〇冊 (阿/六/一二七)
 天理図書館蔵 五〇冊 (二二二/イ一一)
 龍門文庫蔵 五〇冊 (四九四)

関西大学図書館蔵 五〇冊 卷一補写 (C/二三三・〇一/S一/一一一/五〇)

京都府立総合資料館蔵 五〇冊 卷二・三補写 (特九一六/八五)

広島市立中央図書館蔵 五〇冊 卷六一―六六補写 (四八)

大東急記念文庫蔵 五〇冊 序目・卷六七補配第二種本、卷六八・六九補写 (三五/一〇/五五六)

蓬左文庫蔵 四九冊 卷一八補写 (二六二/一)

佐賀県立図書館鍋島文庫蔵 二四冊 卷二九・三〇補写 (鍋/九九三・二/九九)

天理図書館蔵 四〇冊 欠卷一―二二 (二三二/イ七一)

大阪府立中之島図書館蔵 八冊 存卷四〇・四三・六一―六六・八九―九二・一一二―一二一・一二五―一二八

(甲和/一二三六)

成篁堂文庫蔵 四冊 存卷六・三一・三二・四七・四八・五四―五七

成篁堂文庫蔵 三冊 存卷八三―九二

静嘉堂文庫蔵 三冊 存卷一八―二二・三三―三六 (一〇五/二四)

架蔵 一冊 存卷七

新村出記念財団重山文庫蔵 一冊 存卷二三―二五 (二三二・〇二)

新村出記念財団重山文庫蔵 一冊 存卷二〇・一一 (二三二・〇二)

天理図書館蔵 一冊 存卷一六・一七 (〇二/イ一一/五七)

東京大学総合図書館蔵 一冊 存卷一一―一二 (A〇〇/五八七八)

早稲田大学図書館蔵 一冊 存卷一一七 (リ八/一七〇九)

(以下未見)

台湾故宮博物院蔵 五〇冊

栗田文庫蔵 四九冊 「原装丹表紙、題箋付。卷三・四の一冊缺」〔『栗田文庫善本書目』。ただし、卷三・四とあるのは、卷二・三の誤か〕

尊経閣文庫蔵 四八冊

『弘文荘古活字版目録』所載本 五〇冊

『図説光悦謡本解説』所載若林正治氏蔵本（一六一図）

第二種本

京都大学附属図書館蔵 五〇冊（谷村文庫／五―四二／シ／一貴）

内閣文庫蔵 五〇冊（別二五／一）

大東急記念文庫蔵 五〇冊（二二／四〇／五七）

東京大学東洋文化研究所蔵 五一冊 卷六・七補写（貴重／甲三〇）

成篁堂文庫蔵 二九冊

慶応義塾大学図書館蔵 三〇冊 卷二五・二六・五八―六〇補配第一種本（四一／一／三〇）

成篁堂文庫蔵 一五冊 存卷二―四・七―一二・一八―二二・二七―三〇・三七―四二・五四―六〇・一〇二―一

三〇

内閣文庫蔵 二冊 存卷一―三・六一―六九（二七九／一九）

内閣文庫蔵 一冊 存卷九三―九六（二七九―八二）

静嘉堂文庫蔵 二冊 存卷一六・一七・七四―七八（二〇五／二四）

慶応義塾大学図書館蔵 一冊 存卷九七―一〇一（二七九／五四／一）
 （以下未見）

天理図書館蔵 五〇冊 卷二五・二六・三八・四三・六一・六二補写（二三二／イ一七）

第三種本

神宮文庫蔵 五〇冊（一一八一）

東洋文庫蔵 五〇冊（三／A／h／五）

東京大学総合図書館蔵 五〇冊（A〇〇／五八九八）

成算堂文庫蔵 五〇冊

東北大学附属図書館蔵 一三冊（狩／三／五九五四）

国会図書館蔵 四三冊 欠卷一―五・七・七〇―七三・一一二―一二六（WA七／九八）

東京大学総合図書館蔵 一冊 存卷五（A〇〇／五八七九）

東京大学総合図書館蔵 一冊 存卷八（G三〇／四五七）

（以下未見）

台北国立中央図書館蔵 五〇冊

台北国立中央図書館蔵 五〇冊

以上が現存本の簡明目録である。端本を含め、第一種本三一点、第二種本一三点、第三種本一〇点の計五四点を掲載した。このほか、個人蔵のものもあるが掲げなかった。また、古書目録等に掲載されたものは、行論に必要な本に

限って載せておいた。

以下の節では、これら現存本を通覧して指摘される、書誌学的な問題について論じてゆきたい。

三、一冊欠の『史記』をめぐる

現存本を調査してゆくと、第一種本において、全五〇冊のうちの特定の二冊を欠く本が、複数存在することに気がつく。その特定の冊とは、本来の二冊目（三皇本紀・五帝本紀）か三冊目（夏本紀・殷本紀）にあたる一冊である（なお、第一冊は序目にあたる）。

まず、京都府立総合資料館本がわかりやすい例である。本書は三冊目にあたる一冊を古活字版としては欠いており、その欠を写本によって補っている（**図四**）。ところが、この補写の一冊は、他の四九冊と同じ原装の丹空押雷文繋蓮華唐草文様表紙を備えている（**図五**）。これが原装であることは、前述した東北大学附属図書館本にも同種表紙が用いられていることからわかる。このことは、本書の第三冊が古活字本としてはもともと欠けていたこと、補写された第三冊が後代の補配によるものではなく、製本当初より交えられていたものであることを示している。補写された一冊の筆跡はまことに端正というべきで、全体の装訂も堂々としている。恐らくは貴顕に献上、または頒布するたため、工房側で欠冊を補ったものであろう。

三冊目にあたる一冊をもとから欠くと思われる本として、ほかに栗田文庫本がある。本書は四九冊本で、『栗田文庫善本書目』には「原装丹表紙、題箋付。卷三・四の一冊缺」と記される。¹⁸ 卷三とは「殷本紀」、卷四とは「周本紀」にあたり、古活字本では「殷本紀」は卷二「夏本紀」とあわせて三冊目に配され、「周本紀」は一卷で四冊目に配される。よって、栗田文庫本が原装なら、「卷三・四の一冊缺」というのは不審で、恐らくこれは卷二・三の一冊を欠

いていたものを誤記したのだろう。このように考えれば、栗田文庫本も京都府立総合資料館本と同様、三冊目相当部を当初から欠く本であったと推測される。ただし、京都府立総合資料館本は欠冊を写本で補い揃本の体を保ったが、こちらはそこまでする必要はなかったのか、四九冊本のまま世に送られたのである。

一方、二冊目にあたる一冊を欠く本に関西大学図書館本がある。本書は川瀬一馬氏『増補古活字版之研究』に「大阪府立図書館」所蔵とある本で、「巻一至十二零本十冊、商善院旧蔵、第二冊目江戸初期補鈔あり」と紹介されている。⁽¹⁹⁾しかし、大阪府立図書館にかつて蔵されたことはなく、川瀬氏の誤認と思われる。「商善院」も「高善院」の誤り。本書は岡田真氏などを経て、現在では関西大学図書館の蔵するところとなっている。幸いなことに、川瀬氏調査時には一〇冊の零本であったのが、今は僚卷の四〇冊を備え、本来の姿に帰している。そして、この二冊目にあたる一冊が写本によって補われており、古活字版としては本来欠冊であったことが窺える。この補写の一冊は他の四九冊と同様、茶色の空押雷文繫蓮華唐草文様表紙を持つが、文様が微妙に異なる。よって、この一冊は後に補われたものと思われる。書写も江戸初期とはいいがたく、江戸前期とするのが穏当である。

また、二冊目を当初より欠くと思われる本に、嵯峨本『史記』の代表的伝本である内閣文庫本（別二六／一）がある。本書の現在の体裁は、欠巻はないものの全体を四九冊としている。本書は二冊目にあたる巻一と、巻八三一九二とが第二種本三冊によって補配されている。しかし、このうち巻八三一九二が、本来なら三冊に仕立てられるべきところを二冊に綴じられているため、全体が四九冊となっているのである。従って、内閣文庫本は実質四冊分を第二種本によって補ったと理解してよい。そして、このうちの巻八三一九二にあたる三冊が、成篁堂文庫に蔵され、現存している。本書には内閣文庫本と同様の菅得庵の書入や蔵書印があつて、これが内閣文庫本の僚卷であることは一目瞭然である。だとすれば、内閣文庫本の欠冊のうちその存在が知られないのは、二冊目にあたる一冊のみということになる。今後の調査によってこの一冊が出現する可能性も皆無とはいえないが、関西大学図書館本の例を見ても、内閣

文庫本の二冊目が本来の欠であったことは十分推測される。

以上、現存本の調査から、当初より欠冊を持つ第一種本『史記』の存在が知られるが、興味深いことにこのことは史料の上からも確認できる。『慶長日件録』慶長二年一月二七日条は前に見たように、舟橋秀賢が宮中より古活字版の『史記』を拝領したことが記されていた。その三日後、一月三〇日の条には次のような記事が見える。

次史記本先日拝領、一冊不足、仍今日他本全本被替下之、即御礼申入退出、

拝領した『史記』のうち一冊が欠けていたことが判明し、秀賢は願い出て全巻完備した本と交換してもらったというのである。一冊欠の『史記』は、予想以上に広まっていたと見るべきではなからうか。

ところで、長澤規矩也氏は古活字本において、序文や本文の第一葉、あるいは巻末等に異版を交える本が少なくないことを指摘されている。そして、それらの箇所は見本として余分に刷られることがあったため、活字を新たに組み替えて増刷されることがあったのではないかといわれている⁽²⁰⁾。第一種本の『史記』の場合、欠冊となった第二冊・第三冊は本文の冒頭かそれに近い部分である。長澤氏の説かれるように、『史記』についても、見本刷りのために不足を来したという事情があったのか、そのあたりは定かでない。ただ、たとえそうでなくとも、古活字版による大部の書では、各巻各丁の印刷部数に前後を生じることがあったようだ。中でも刷りはじめに近い巻ほど不足を来すことがあったらしく、その欠を補うため新たに活字を組み、異版を作製することがあった。

慶長一五年刊の古活字版『太平記』がよい例である。本版には全四〇巻、剣巻・目録共二一冊のうち、巻一から巻四までを異版とするもの（尊経閣文庫本・書陵部本）、巻五・六を異版とするもの（大東急記念文庫本・河野美術館本）、巻五から巻八までを異版とするもの（ソウル大学本）、巻七から巻一一までを異版とするもの（福井市立図書館

本）等が存在する。⁽²¹⁾ これら異版では活字と匡郭の摩滅が目立っており、全冊が摺刷された後にこれらが刷られたことがわかる。製本・頒布の過程で不足を補うため、異版が作製され、交えられたものと見てよい。そして、これらの不足は『太平記』でも、全巻のうちの前半部に現れる。『史記』が本文のはじめにあたる第二冊乃至第三冊に不足を持つと同じ傾向である（第一冊は序目で、こうした部分は本文よりあとに印刷されたい。『太平記』の場合でも、目録・剣巻の一冊は本文よりあとに印刷されるのが常である）。

さてここで、『言経卿記』に見られた四冊不足の『史記』について思い出したい。第一節に述べたように、言緒が入手した『史記』のうち四冊が不足だったことの事情としては、その『史記』が四六冊まで印刷され、あとの四冊が未刊であったためか、一旦印刷を終えたものの、特定の冊に刷り部数の不足があったためか、の二つの可能性が考えられた。刊行された第一種本の『史記』が、頒布を進めるうちに第二冊、あるいは第三冊にあたる一冊に欠を持つようになったのは見てきたとおりである。やがて第二冊・第三冊両方を欠く、二冊欠の『史記』も現れたのではなからうか。そして、こうした考えを進めれば、四冊欠の本が現れることも想定できるのではないか。『言経卿記』に記された四冊不足の『史記』とは、第一種本の頒布の終盤に現れた一本だった可能性をここでは提示しておきたい。

四、表紙と裏張

今ここで一冊欠の『史記』にこだわったのは、これらの本の存在が、現存する第一種本それぞれの製本・頒布の時期を特定する手がかりを与えてくれるからである。よく知られているように、古活字本の印刷工程は植字・摺刷・解版を一丁ずつ繰り返し返すものだから、刊行物はまず必要部数を刷りためておいて、需要に応じて表紙を懸けて製本し、頒布されるものであった。従って、同版本であっても、製本・頒布の時期には本によって違いがあった。⁽²²⁾

第一種本『史記』の場合、現存本には種々の原表紙が残されているが、それぞれいつの時点で製本されたものだろうか。これらの表紙のうちには、古活字版の刷反古を裏張に持つものもある。これらの製作年代を推定することは、裏張に用いられた古活字版の刊行時期の下限を確定することにもつながる。

ところで、寛永期においては、本屋と表紙屋の分業体制がすでに明確になっていることが知られている。⁽²³⁾ そうした体制の萌芽はさらに遡るのかもしれないが、少なくとも嵯峨本の工房では表紙の製作を含め、出版に関わる作業が一貫して内部で行われていたようである。そのことは、嵯峨における出版物の表紙裏張に、嵯峨の地との因縁を示す反古がしばしば見いだせることから窺える。⁽²⁴⁾ よって、嵯峨本類から現れた刷反古は、嵯峨における出版活動の一端を示す好資料となる。

第一種本『史記』は『言経卿記』の記述から、慶長八年以前の刊行が確実視される。そして、前節における推測が正しいとするならば、同年の十一月二〇日以前に完本のもの、一冊欠のものがすでに世に送られていたことになる。これを念頭に置いて、各本の原表紙について見てゆこう。第一種本の原表紙には、現在のところ黒空押雷文繫蓮華唐草文様・淡藤色雲母刷雷文繫牡丹唐草文様・丹空押雷文繫蓮華唐草文様・淡茶色空押雷文繫牡丹唐草文様・焦茶色空押唐草十字印摺文様・栗皮表紙の六種が確認される。

まず、完本で原装表紙を備えるのは、黒空押雷文繫蓮華唐草文様表紙の東洋文庫本（三/B/c/一）一本だけである。原題簽を押し、最も正格を保った形態といえるだろう。ただし、同表紙を持つ本は見つかっていない。

次に淡藤色雲母刷雷文繫牡丹唐草文様表紙は蓬左文庫本に用いられる（図六）。本書は巻一八を補写し、前冊に合綴しているために四九冊本となっているが、もとは完本だったと思われる。嵯峨本『史記』の中で唯一、雲母刷文様を持つ表紙である。これと類似した雲母刷表紙は他の嵯峨本にも用いられるが、⁽²⁵⁾ 完全に同じ文様のものはない。しかし、嵯峨本とも関連深い謡本の写本「百番本」（東京芸術大学ほか蔵）に同一の表紙が用いられている（『図説光悦謡

本解説』にいう「雷文蔓牡丹丙」へ一七二図。『史記』の刊行が、嵯峨本の工房と密接な関係を持っていたことを示す一例となろう。表章氏の調査によれば、百番本にはこのほか、蝶にメヒシバ、水に蜻蛉、松山満月をはじめとする嵯峨本「観世流謡本」と同版、あるいは同形異版、左右対称による版など、二〇種以上の雲母刷文様表紙があるという。そして、これらと同種の文様を持つ表紙や料紙が、慶長一〇年奥書の「大原御幸」と同一一年奥書の「後藤本」にも用いられている。表氏は「大原御幸」「後藤本」との関係から推測し、「百番本」の製本時期を慶長一一年から一二年頃と推測されている。⁽²⁶⁾ただ、これら雲母刷文様の版下自体は、早期に製作されていたという見解もある。即ち、中部義隆氏は百番本の表紙を依屋宗達の初期作品と位置づけた上で、その版下作製時期を慶長七年頃かそれ以前とされている。⁽²⁷⁾この考えにもとづけば、慶長八年一月以前に製本された蓬左文庫本『史記』の雲母刷表紙は、そのやや前に作られた版下をもとに作製されたということになる。

丹空押雷文繫蓮華唐草文様表紙は京都府立総合資料館本に用いられる。『栗田文庫善本書目』によれば、栗田文庫本も「原装丹表紙」と記される。文様の有無は知り得ないが、同書目が他書についても文様の有無・形状を注記しないことに鑑みれば、これも京都府立総合資料館本と同表紙であった可能性が高い。ならば、本表紙は三冊目を欠く本に共通して懸けられていたことになる。ただし、完本である台湾故宫博物院本の表紙も同文様で（慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵マイクロフィルムによる）、『弘文荘古活字版目録』所載本も同表紙であったようだから、この表紙は完本にも用いられていたようだ。また、第三種本の東北大学附属図書館本も茶色表紙ながら、同じ文様を持っている。⁽²⁸⁾この表紙が息長く用いられたことがわかる。

二冊目を欠く関西大学図書館本には、淡茶色空押雷文繫牡丹唐草文様表紙が用いられている。零本ながら、大阪府立中之島図書館本・『図説光悦謡本解説』所載若林正治氏蔵本の表紙も同文様である（一六一図）。本表紙の文様は蓬左文庫本の表紙の雲母刷文様と左右対称になっており、一方が一方を覆刻したものであることがわかる。表氏は百番

本表紙（蓬左文庫本『史記』も同）の雲母刷の雷文繫牡丹唐草文様が一時的に現れた孤立的なものだったことから、空押文様の本表紙を先行とし、雲母刷文様の表紙を覆製と推測された。⁽³⁰⁾だが、蓬左文庫本がもととは元本であるのに対し、関西大学図書館本が一冊欠の本であったことを考えると、空押文様の表紙の方が後出であったのかもしれない。微妙な問題であるが、可能性のみ示しておきたい。

唐草十字印襷文様表紙を持つ内閣文庫本（別二六／一）も、二冊目を欠く本かと推定された。本表紙と類似の文様は「観世流謡本」ほかの嵯峨本類に多数見られるが、⁽³¹⁾同一の版によるものはない。内閣文庫本の表紙でさらに注目されるのは裏張の存在である。川瀬一馬氏は古活字謡本の反古が用いられていることを指摘し、これと同版本に安田文庫蔵へ八島⁽³²⁾がある⁽³²⁾とされた。その後、表氏は同版本に鴻山文庫蔵へ老松⁽³³⁾ほか四冊八番（一番綴三冊、五番綴一冊）があることを紹介し、これらを慶長古活字中本と称された。そして、内閣文庫本『史記』裏張の反古が、へ安宅⁽³⁴⁾ほかの二六番であることを指摘された。⁽³³⁾さらに近年、竹本幹夫氏はこれに加えてへ源氏供養⁽³⁴⁾など二番分の存在を紹介され、同時にこれら反古が安田文庫本（早稲田大学演劇博物館現蔵）へ八島⁽³⁴⁾・鴻山文庫本（法政大学現蔵）へ老松⁽³⁴⁾等とは別版であることを論じられた。⁽³⁴⁾

また、竹本氏はこれら刷反古には謡本だけでなく、嵯峨本『徒然草』の反古も混入していることを報告されている（図七。第四一冊前表紙⁽³⁵⁾）。このほか、内閣文庫本『史記』裏張の反古には書状や仏書（写本）の断簡なども見える。例えば、第二三冊後表紙からは、「御蔵米預り申御事」などと記された書状が見いだされる。本書が角倉のごとき、しかるべき大商人の関与する環境で製作されたことを窺わせよう。また、第八冊後表紙には、「けいちやう三年／五月十日」という日付を有する書状の断片が用いられている（図八）。かかる書状がもとから年紀を有していたとは考えがたく、また年紀の部分も一見して後筆とわかる。さらに「三年」の部分は重ね書きされたと思しく、全体としても判読困難である。本書状の扱いには慎重を期する必要があるが、そうはいつても、この年紀にも記されるなりの必

然性があつたのだからことも無視できない。仮にこれを慶長三年のものとして認めてよいとするならば、表紙の製作時期を推定する材料の一つになるのだが、⁽³⁶⁾ここでは紹介するにとどめたい。

以上が完本および一冊欠の『史記』に用いられた原装表紙である。最後に栗皮表紙本をとりあげる。この表紙を持つ本には完本がなく、よつて厳密な意味で製本の時期を特定することはできない。ただ、慶長八年十一月の前後を大きく降ることはないと考えてよいだろう。原装の栗皮表紙を持つ本は、静嘉堂文庫本・新村出記念財団重山文庫本（巻二二―一五と巻二一〇・一一一を有する零本二部）・天理図書館本（〇一一／イ一一／五七）・早稲田大学図書館本・成篁堂文庫本（四冊本）であるが、いずれも一冊から四冊までの零本である。このうち注目されるのは、静嘉堂文庫本・重山文庫本（巻一三―一五の一本）・天理図書館本の三本である。これらは僚卷の關係にあり、この表紙に裏張として古活字版の反古が用いられている。

夙に川瀬氏は、静嘉堂文庫本の表紙裏張に二種の古活字版舞の本の反古が用いられていることを報告された。⁽³⁷⁾一種は安田文庫本（早稲田大学演劇博物館現蔵）「伏見常盤」と同種の活字を用いるもので、もう一種は「光悦の亜流に属する書体の活字」を用いる「高館」等であるという。残念ながら、現在静嘉堂文庫本に添えられた刷反古は伝わっておらず、実物を確認することはできない。しかし、重山文庫本と天理図書館本から、それぞれ二種の古活字版舞の本の存在を見ることができるとともに「八島」「伏見常盤」の二種の刷反古である（図九・一〇）。このうち「八島」の活字が光悦の亜流というべき書体で、静嘉堂文庫本に附されていたという「高館」は、これと同活字のものであつたに違いない。この「八島」の異植字版に龍門文庫蔵の「八島」がある。また、川瀬氏も指摘されるように、同種活字を用いた舞の本に「満仲」（大島雅太郎氏旧蔵。大英図書館現蔵）⁽³⁸⁾がある。

一方、「伏見常盤」の方は御家流風の書体である。これと同活字を用いる舞の本としては、天理図書館蔵の「伏見常盤」があるが、これも異植字版の關係にある。川瀬氏は刷反故「伏見常盤」の活字を安田文庫本「伏見常盤」のも

のと同一視されているが、これは誤りである。早大演劇博物館に現蔵される同本を検するに、両者の活字は別であることがわかる。刷反古「伏見常盤」の活字があくまでも御家流の穏やかさを基調としているのに対し、安田本「伏見常盤」の活字は御家流に近い書体ながら、筆画を強調する点に光悦・素庵の書癖に通じるものがある。従って、天理本「伏見常盤」と安田本「伏見常盤」も全くの別版である。³⁹素朴な天理本が先行し、安田本は嵯峨本風に展開する後続の印本と考えてよいだろう。ちなみに安田本は具引色替料紙を使用しており、この点にも嵯峨本との関連が強く感じられる。なお、刷反故および天理本「伏見常盤」と同活字を用いる本に、近時「築島」一冊が現れたことを附言しておく（『奇書 青裳堂古書目録』二〇〇三年五月）。

五、嵯峨本前史の構想

前節でとりあげた本のうち、表紙裏張に刷反古を持つのは唐草十字印襷文様表紙の内閣文庫本と、栗皮表紙の重山文庫本・天理図書館本であった。特に内閣文庫本は第二冊にあたる一冊を欠くと考えられる本だから、本稿の立場からすると、その表紙の製作時期は慶長八年一月以前ということになる。従って、この裏張に用いられた慶長古活字中本謡本と嵯峨本『徒然草』の刊行時期も、これ以前ということになる。

さて、嵯峨本の中で刊行年時が明らかにされている本は少ないが、その中でも最古のものは慶長一三年の中院通勝跋を附す『伊勢物語』である。嵯峨本『伊勢物語』には、このほか慶長一四年・一五年の跋を附すものもある。同様に『伊勢物語聞書（肖聞抄）』には慶長一四年の通勝跋が附される。また、嵯峨本第一種本『方丈記』は、東洋文庫本（三/B/a/26）に慶長一五年七月の識語があることから、それ以前の刊行であることがわかる。「観世流謡本」には刊記の類はないが、表章氏は慶長一〇年八月の観世身愛奥書の「大原御幸」（写本）の節付・装訂の類似か

ら、最も早く刊行された本は慶長一〇年まで遡らせることが可能だとされた⁽⁴⁰⁾。このように嵯峨本の刊行は、およそ慶長一〇年代に入ってからなされたものようである。よって、いま問題にしている慶長古活字中本謡本や嵯峨本『徒然草』は、それ以前の平仮名古活字の刊行書ということになる。

慶長古活字中本をめぐって表氏は、嵯峨本のごとき豪華な本が製作される前に、慶長古活字中本のごときものが刊行されたと考える方が常識的だとしながらも、内閣文庫本『史記』の装訂時が、同書にしたためられた識語の年時である慶長一二年からどこまで遡れるか確定できないとして、嵯峨本との先後関係についての断定を控えておられる⁽⁴¹⁾。また、竹本幹夫氏は、嵯峨本（そのうち早期に刊行された帖装本の類）が句点や役の交代を示す肩鉤を手で書き入れているのに対し、慶長古活字中本のうち鴻山文庫本・安田文庫本が肩鉤を印刷し、『史記』裏張の本が句点・肩鉤の両方を印刷していることから、技術的に見て嵯峨本の刊行は慶長古活字中本より先行するとの見解を示された⁽⁴²⁾。しかし、内閣文庫本『史記』の製本時期が慶長八年一月以前ということになると、その表紙裏張に用いられた慶長古活字中本は嵯峨本以前の刊行であった可能も浮上してくる。

また、嵯峨本『徒然草』の刊行も慶長八年一月以前ということになれば、本書の刊行が他の嵯峨本に対して遙かに早いことになる。ただし、その点は『徒然草』の印面を見れば、ある程度納得できるだろう。そもそも『徒然草』は嵯峨本の一つに数えられるが、その活字の字体は「観世流謡本」や『伊勢物語』をはじめとする他の嵯峨本と多少異なっている。これらの活字の字体が、光悦あるいは素庵のものといわれる書風が顕著であるのに対して、『徒然草』の方は確かにそうした書風につながる字様を有しているが、癖が強く出ていない。そこに双方の時間的隔たりを認めてもよいと思われる⁽⁴³⁾。従って、『徒然草』は嵯峨本刊行の最盛期の前段階に誕生した本と位置づけるべきだろう。

一方、栗皮表紙本の製本時期は慶長八年一月以前と特定できないものの、それを大きく降るものでもないと思われる。栗皮表紙本から現れた刷反古のうち、舞の本「八島」の活字書体は「光悦の垂流に属する」（『増補古活字版之

研究』と説明されたり、同活字を用いる「満仲」は「光悦流の筆癖が顕著だが、伝嵯峨本の古今集の版下と似て、のびやかさを欠き、品格も下がるから、光悦の弟子の手になったものであろう」(『弘文荘古版本目録』一九七四年)とも評されてきた。これらは「観世流謡本」や『伊勢物語』などと比べると確かにのびやかさを欠き、全体に詰まった印象を与える本である。また、書体も光悦・素庵的な癖がやくどいように見受けられるが、これは筆者だけの主観ではあるまい。⁽⁴⁴⁾ こうした「八島」「満仲」の印面に、洗練されきる以前の、嵯峨本前段階の姿を認めてもよいのではなからうか。

栗皮表紙本から現れた舞の本「伏見常盤」の反古は、「八島」とは書風の異なる御家流風の活字が使用されていた。「伏見常盤」も間違いなく嵯峨の工房で刊行されたものと思われるが、だとすれば、ここでは光悦・素庵流に限らず様々な書風の平仮名活字が試されていたことになる。例えば、前述の安田文庫本「伏見常盤」は、そうした中から嵯峨本が生み出される過程を映し出す一つの姿だったと位置づけてもよい。

さて、すでに川瀬一馬氏は具引き色替わり料紙を使用する安田文庫本「伏見常盤」や、雲母刷文様の料紙を使用する安田文庫本『徒然草』(嵯峨本とは別)⁽⁴⁵⁾などをあげ、これらが嵯峨本に先行し、嵯峨本の意匠に影響を与えた可能性があることを示唆された。⁽⁴⁵⁾ いわゆる嵯峨本前史をめぐっては、川瀬氏によってこのように言及されてきたのであるが、いま『史記』裏張りに用いられた諸版の刊行時期が、慶長八年一月以前またはその頃と特定されたことにより、こうした推測は補強され、より具体的な像を結ぶことになるだろう。「観世流謡本」や『伊勢物語』に代表される嵯峨本は、突如その姿を現したのではない。そこに至るまでに平仮名古活字本刊行の試行錯誤があり、その延長線上に嵯峨本が誕生したのである。嵯峨本『史記』はそうした慶長期前半の出版事情を考える上で、様々な情報を与えてくれる貴重な資料であるといつてよい。

注

- (1) 近年、嵯峨本所用活字の版下筆者を角倉素庵とする説が、林進氏によって提起されている（「角倉素庵の書と嵯峨本」『水荃』第二九号、二〇〇一年。『特別展 没後三七〇年記念 角倉素庵―光悦・宗達・尾張徳川義直との交友の中で―』へ大和文華館、二〇〇二年）。
- (2) 川瀬一馬氏は嵯峨本の定義を、本阿弥光悦自身または光悦の意を受けた門下が版下を書き、美術的意匠を凝らした雕刻書、あるいはその影響を豊富に蒙った雕刻書としているため、『史記』を嵯峨本に数えない（『増補古活字版之研究』へABAJ、一九六七年）上巻四一四・四二二頁。しかし、岡崎久司氏は『史記』を含め、嵯峨本の整合性ある定義を再構築すべきだとの主張をされている（『嵯峨本再考』『特別展 光悦と能―華麗なる嵯峨本の世界―』へMOA美術館、一九九九年）所収）。
- (3) 素庵と出版をめぐる近年の論攷としては、森上修氏「初期古活字版の印行者について―嵯峨の角倉（吉田）素庵をめぐる―」（『ピブリア』第一〇〇号、一九九三年）が詳しい。
- (4) 『国史館日録』寛文七年一月一七日程に、
 其後因榮清懇請、名之曰周、字之曰維盈、彼本姓樋口、一姓本島、故其名・字共島字而授之、且作其説与之、彼頃日写朱句於左伝全部、奇其志学、而今夕与旧本史記評林一部以励之、而命彼写朱句於家本倭板史記、余家蔵史記四五部故如此、と見え、さらに同八年八月一日条に、
 周史記朱句皆成、乃授跋語、と見える。
- (5) 岡崎久司氏注（2）前掲論文。
- (6) 江嶋伊兵衛氏・表章氏『図説光悦謡本解説』（有秀堂、一九七〇年）一九頁、岡崎久司氏注（2）前掲論文。
- (7) 堀勇雄氏『林羅山』（吉川弘文館、一九六四年）五六頁、鈴木健一氏『林羅山年譜稿』（べりかん社、一九九九年）一四頁、森上修氏注（3）前掲論文。なお、筆者もかつて『史記』の慶長四年刊行説をとったことがあるが（『出版文化の周辺』『国文学』二〇〇〇年六月号）、今は以下論じるとおり考えを修正する。
- (8) 林屋辰三郎氏『角倉素庵』（朝日新聞社、一九七八年）一一二頁。
- (9) 本記事への注目は、早く新村出氏によってなされている（『要法寺版の研究』「柱下漫語」。ともに『新村出全集』第八卷へ筑摩

- 書房、一九七二年）所収。初出はそれぞれ一九二〇年、一九一九年。
- (10) 栗田元次氏『栗田文庫善本書目』（中文館書店、一九四〇年）二九頁。
- (11) 「慶長十三町夷則自恣日、以下所模幻雲師之本」之善恵翁之本上而加朱之句読、墨之和点、又抄書于其上、豈不欣然乎」とある。
- (12) このほか、新村出氏が紹介された新見正路の『賜蘆書院儲蔵志』著録本の識語にも注目しておきたい（注（9）前掲「要法寺版之研究」）。該本には「……于時慶長拾壹曆夷則洛下道春本ニテ新加丹烟者乎城西広隆寺桑門知存書之」と、慶長一年七月に加点した旨の識語があったという。その版式は「界欄アリ」「八行十七字」とあるから、今日いう第一種本にあたる。なお、道春（羅山）本をもとに訓点を施した本としては、慶長一二年から一六年にかけて菅得庵により加点された内閣文庫本（別二六／一）・成篁堂文庫本（三冊本）がある。古活字版『史記』への加点については、東福寺善恵軒の彭叔守仙の本が用いられることがあったようで、究明すべき点が多いが、本稿では触れ得ない。
- (13) 小秋元段「表紙裏の謠本」（『鏡仙』第五〇二号、二〇〇二年）。なお、内閣文庫本『史記』の装訂の時期をめぐる問題など、以下の論は該論での考えを補正したところがある。
- (14) 川瀬一馬氏注（2）前掲書三八〇・三八一頁。
- (15) 川瀬一馬氏注（2）前掲書三八〇・三八一頁。なお、川瀬氏は、第一種本の活字は下村生蔵刊『中庸』の活字を襲用したものと指摘される（同四二八頁）。
- (16) 川瀬一馬氏注（2）前掲書三八一頁。
- (17) 『大東急記念文庫善本書目』（一九五六年）も函架番号「二二／四〇／五七」の本を「元表紙」と認める。
- (18) 栗田元次氏注（10）前掲書二九頁。
- (19) 川瀬一馬氏注（2）前掲書三八〇頁。
- (20) 長澤規矩也氏「叡山活字版について」（『長澤規矩也著作集』第二卷へ汲古書院、一九八二年）所収。初出、一九六六年）、「蔵書めぐり（一）内閣文庫」「古書の整理と発見（三）」（『長澤規矩也著作集』第六卷へ一九八四年）所収。初出はそれぞれ一九五五年、一九六五年）、『図書学辞典』（三省堂、一九七九年）五三・五四頁。
- (21) 小秋元段「古活字版『太平記』書誌解題稿」（『法政大学文学部紀要』第四七号、二〇〇二年）参照。
- (22) 林望氏「嵯峨本の夢——『嵯峨本考』の解題にかえて——」（『典籍図録集成1 嵯峨本考』へ名著普及会、一九九二年）所収）参照。

なお、こうした問題に関しては、表章氏も注(6)前掲書一八頁において、「謠本零葉を表紙裏貼りに使用している内閣文庫本『史記』の装訂が、必ずしも刊行直後のものとは断定できないであろうから、若干疑義が存するように思われる」と注意を喚起される。

- (23) 渡辺守邦氏『古活字版伝説』第二章「寛永時代の出版事情―表紙裏の反古・その二―」(青裳堂書店、一九八七年。初出、一九八三年) 参照。

- (24) 例えば、東洋文庫・陽明文庫蔵慶長一三年刊嵯峨本『伊勢物語』から同じく嵯峨本『伊勢物語』の反古が、国会図書館・大東急記念文庫蔵嵯峨本『伊勢物語聞書(肖聞抄)』から慶長一〇年下村生蔵刊『元亨釈書』の反古が現れたのは、その好例。そのほか、高木浩明氏は学習院大学蔵の下村本『平家物語』写本の表紙裏張りに古活字版『医学正伝』の反古が用いられていることを紹介され(「下村本『平家物語』と制作環境をめぐって」『二松学舎大学人文論叢』第五八輯、一九九七年)、坂巻理恵子氏は高野山大学蔵片仮名古活字三卷本『宝物集』の雲母刷文様表紙裏張りに古活字版『医方大成論』の反古が用いられていることを紹介された(説話文学会二〇〇〇年四月二二日例会発表『『宝物集』片仮名古活字三卷本についての書誌学的報告』)。反古として現れた『医学正伝』『医方大成論』はいずれも版種未詳ではあるが、両氏ともに角倉の出版活動との関連を推定されている。

- (25) 江嶋伊兵衛氏・表章氏注(6)前掲書一六二頁参照。

- (26) 江嶋伊兵衛氏・表章氏注(6)前掲書一三九頁。

- (27) 中部義隆氏「謠本百番本の木版雲母刷料紙裝飾について」(『大和文華』第一〇三号、二〇〇〇年)。なお、注(1)前掲図録八八頁は、百番本の題簽について、筆者を角倉素庵、下絵を依屋宗達と推定する。

- (28) 『弘文荘古活字版目録』(一九七二年)に「表紙は赤茶色地に大きく唐草の模様を押し出した原装」とある。

- (29) 小秋元段注(13)前掲論文では、東北大学附属図書館本の表紙に一種の補強材として、中本の大きさの謠本(源氏供養)の表紙が挟まれていることを報告した。該表紙は栗皮色(二〇・八×一四・六糎)、左肩原題簽(一〇・一×二・六糎)に光悦書風で「源氏供養」と刻す。近世初期刊行の(源氏供養)の光悦書風題簽数種と比べたが、筆者の不明か、同一のものを見いだし得ない。あるいは慶長古活字中本のものか。もしそうであり、さらに(源氏供養)の表紙を挟む処置が、装訂当初からとられていたとするならば、これも古活字版『史記』と慶長古活字中本との製作環境の近しさを示す資料となる。

- (30) 江嶋伊兵衛氏・表章氏注(6)前掲書一五二・一六二頁。

- (31) 江嶋伊兵衛氏・表章氏注(6)前掲書一六一頁。

- (32) 川瀬一馬氏注(2) 前掲書四〇〇頁。
- (33) 表章氏『鴻山文庫本の研究』(わんや書店、一九六五年)一三六頁、江嶋伊兵衛氏・表章氏注(6) 前掲書一八・一九頁。
- (34) 竹本幹夫氏「現存最古の観世流謡版本」(『能楽タイムズ』第五五九号、一九九八年)、『早稲田大学演劇博物館蔵特別資料目録 5 貴重書 能・狂言篇』(一九九七年)一七頁。
- (35) 川瀬一馬氏注(2) 前掲書五二四・五二五頁は、嵯峨本『徒然草』を五種に分類する。その中で『史記』裏張に使用された『徒然草』は、第一種本に一致する。なお、川瀬氏前掲書における嵯峨本『徒然草』第一種本・第二種本の弁別には聊か混乱がある。現存本中、第二種本と認定できるものは内閣文庫本しかなく、同本は現在、破損により閲覧することが不可能である。よって、『史記』裏張の『徒然草』を第二種本と比較することはできていない。
- (36) この点、渡辺守邦氏が注(23) 前掲書第一章「版本零葉の種々相―表紙裏の反古・その一―」(初出、一九八六年)において、「表紙裏と本体とが、ともに古活字版である場合、両者の刊年のへだたりは、三、四年以内に限られるものようである」と述べておられるのは参考になる。
- (37) 川瀬一馬氏注(2) 前掲書四〇一頁。なお、小林健二氏「絵入り版本「舞の本」の挿絵の形成」(『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲―』(三弥井書店、二〇〇一年)所収。初出、一九九八年)参照。
- (38) 『大英図書館蔵日本古版本目録』(一九九三年)五二五頁参照。
- (39) 小林健二氏注(37) 前掲論文参照。ただし、天理本・安田本の先後関係については、私見と公説を異にする。
- (40) 江嶋伊兵衛氏・表章氏注(6) 前掲書四一頁。
- (41) 江嶋伊兵衛氏・表章氏注(6) 前掲書一九頁。内閣文庫本『史記』の識語については注(12) 参照。
- (42) 竹本幹夫氏注(34) 前掲論文。
- (43) 嵯峨本『徒然草』所用の活字をめぐることは、岡崎久司氏が「本文書風は「光悦様」というが、限りなく御家流にも近い」と指摘され(注(2) 前掲図録・作品解説「17徒然草 古活字版(第一種本)」の項)、森上修氏も五、七字に及ぶ連彫活字が用いられる『徒然草』の特色を、二、四字の連彫活字を使用する「観世流謡本」などとの違いとして注目される(『香散見草』第三号、二〇〇三年)。
- (44) 近年、林進氏により角倉素庵の筆跡の研究が進んだが、舞の本「八鳥」所用の活字こそ、素庵の書風をよく示すものではないだろうか。また、下村本『平家物語』の活字書風にもよく似ると思われる(注(1) 前掲図録九二頁は、本書の活字版下の筆者

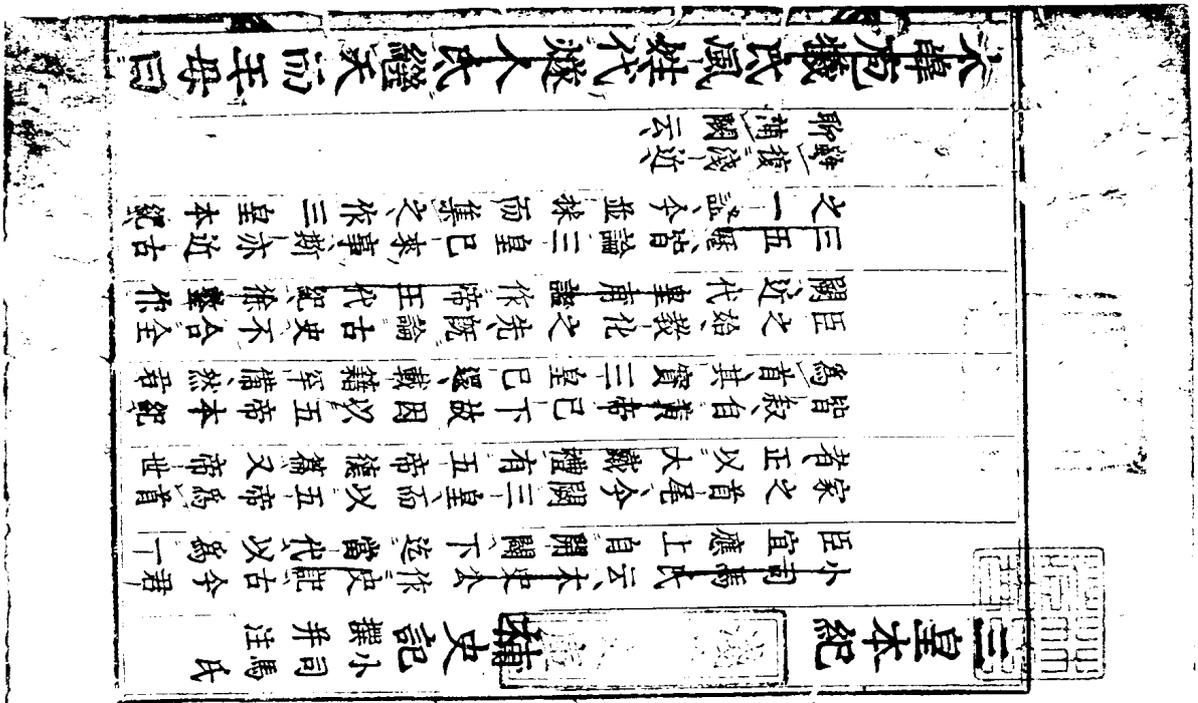
を素庵と推定する。

- (45) 川瀬一馬氏注(2) 前掲書四〇一・四二六頁。また川瀬氏は、下村本『平家物語』の刊行も早くになされたことを指摘しておられる(四二九頁)。

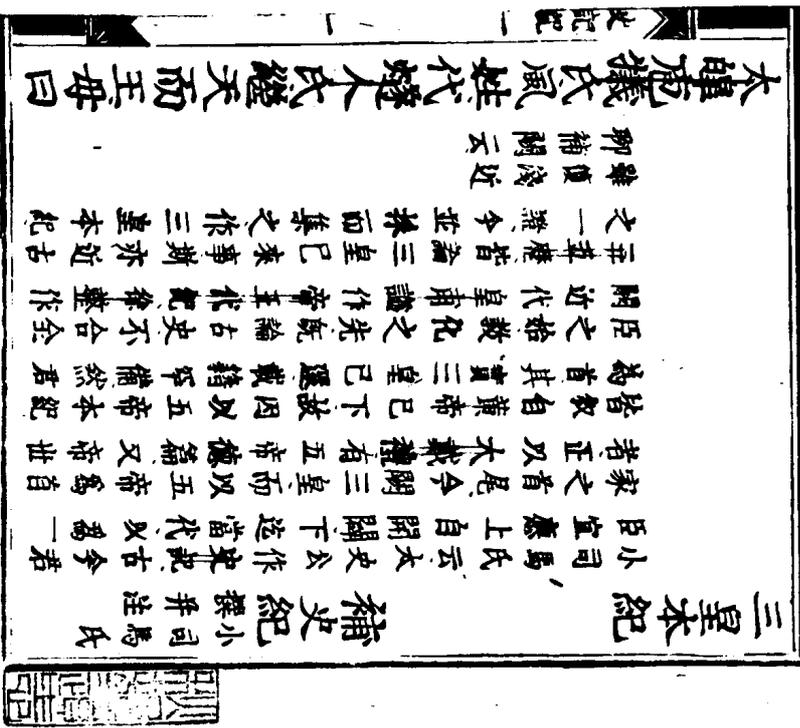
〔附記〕

本稿は二〇〇二年一月三日、大和文華館において開催されたシンポジウム「角倉素庵と『嵯峨本』―近世の出版文化を考える―」における報告をもととします。報告の機会を与えてくださった大和文華館の林進氏にあつく御礼申し上げます。また、調査や図版掲載に際しては、各図書館・文庫の方々のご高配にあずかりました。あわせて御礼申し上げます。

図一 第一種本（国立公文書館内閣文庫蔵。二七九ノ一八）

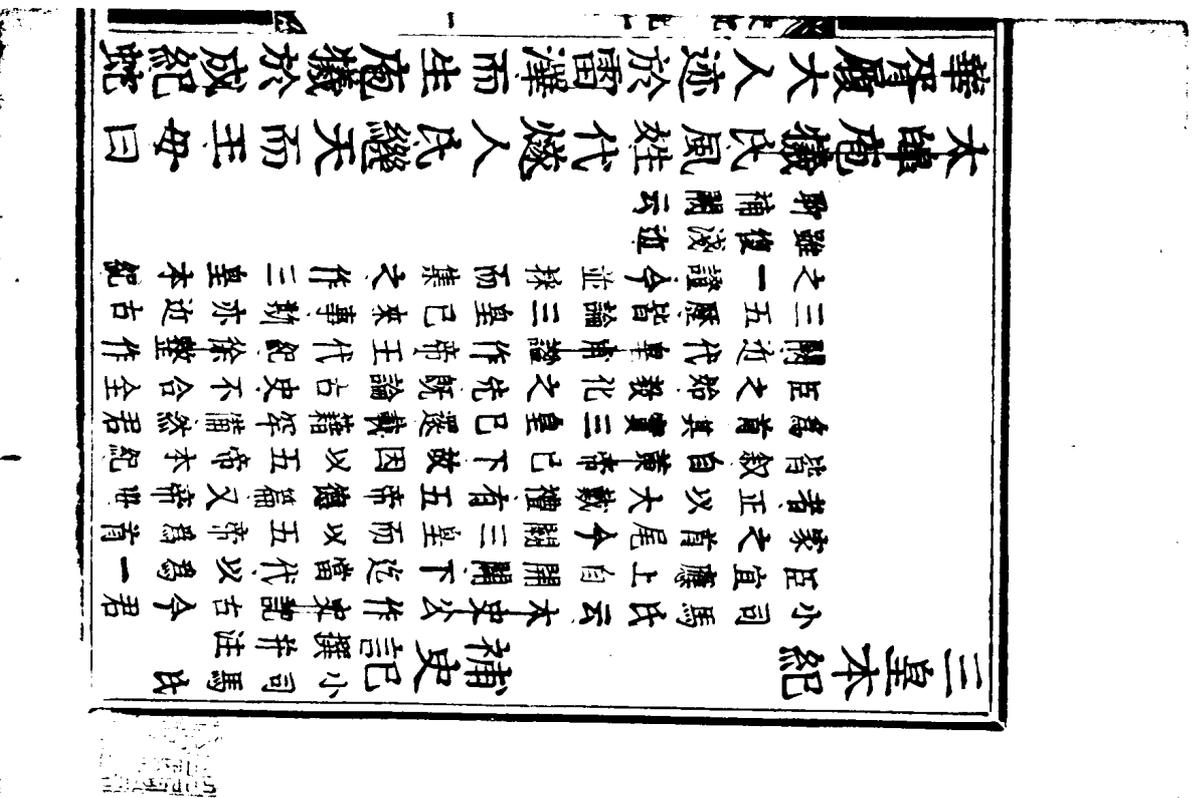


図二 第二種本（京大附屬図書館蔵）

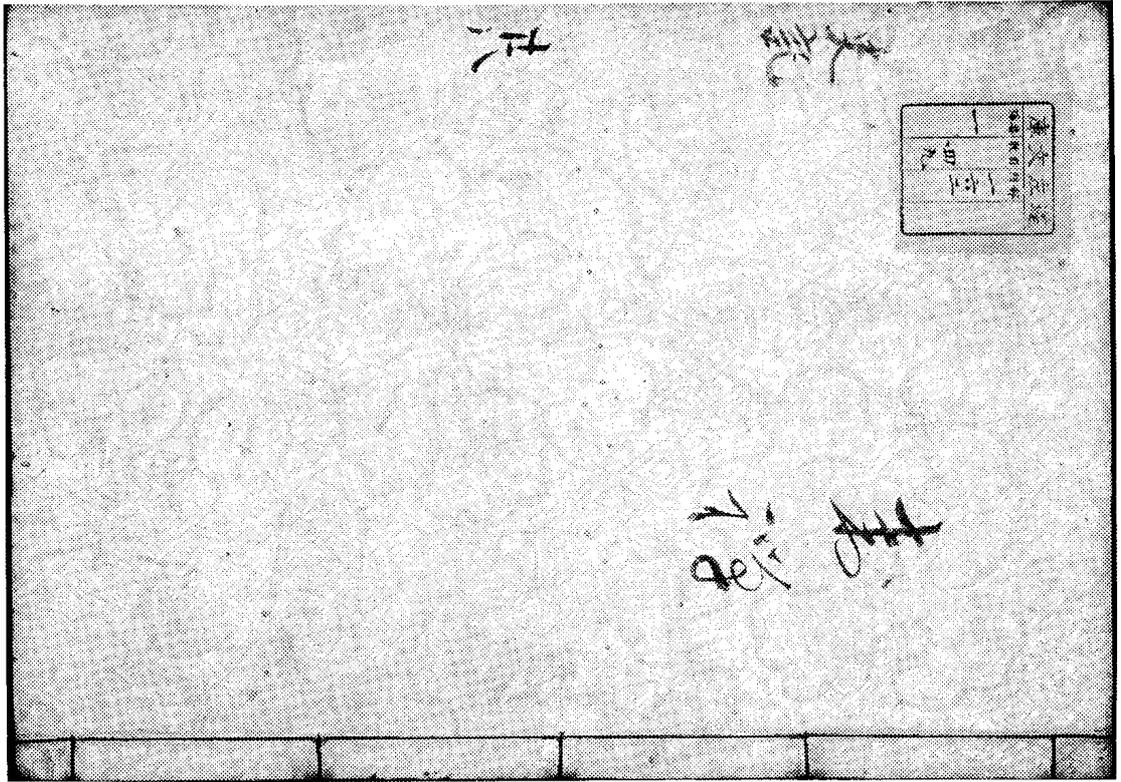




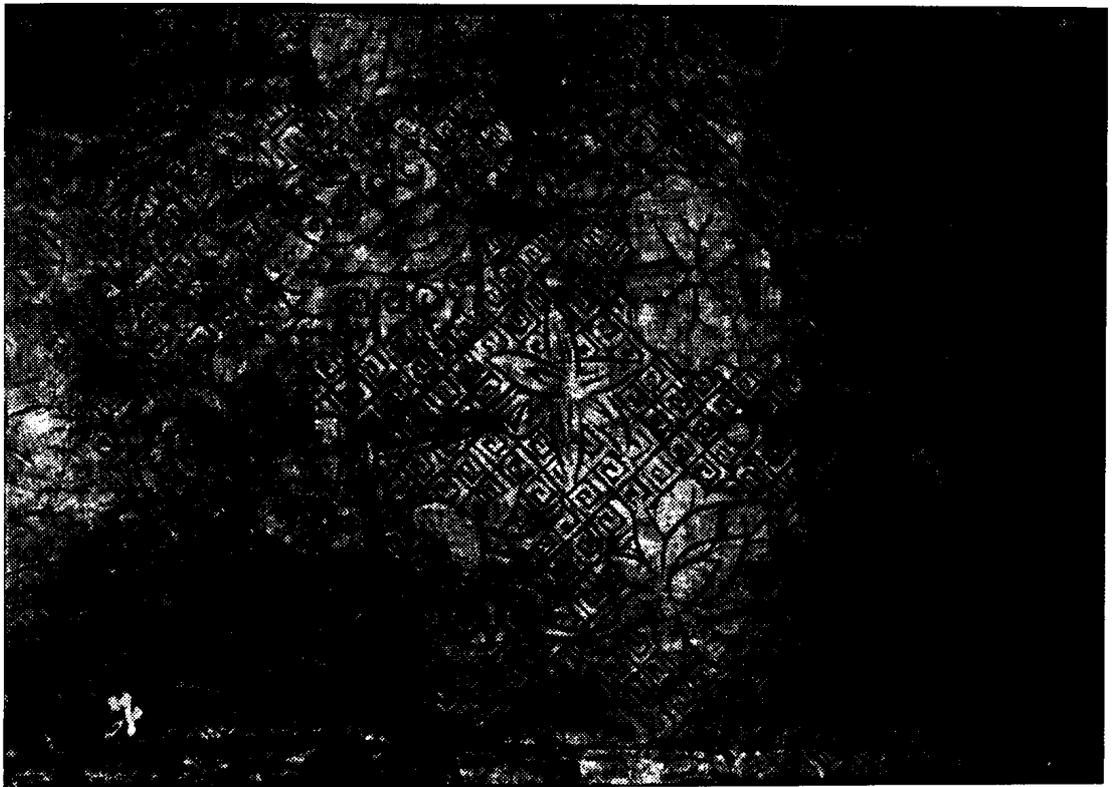
図四 京都府立総合資料館本 三冊目の首



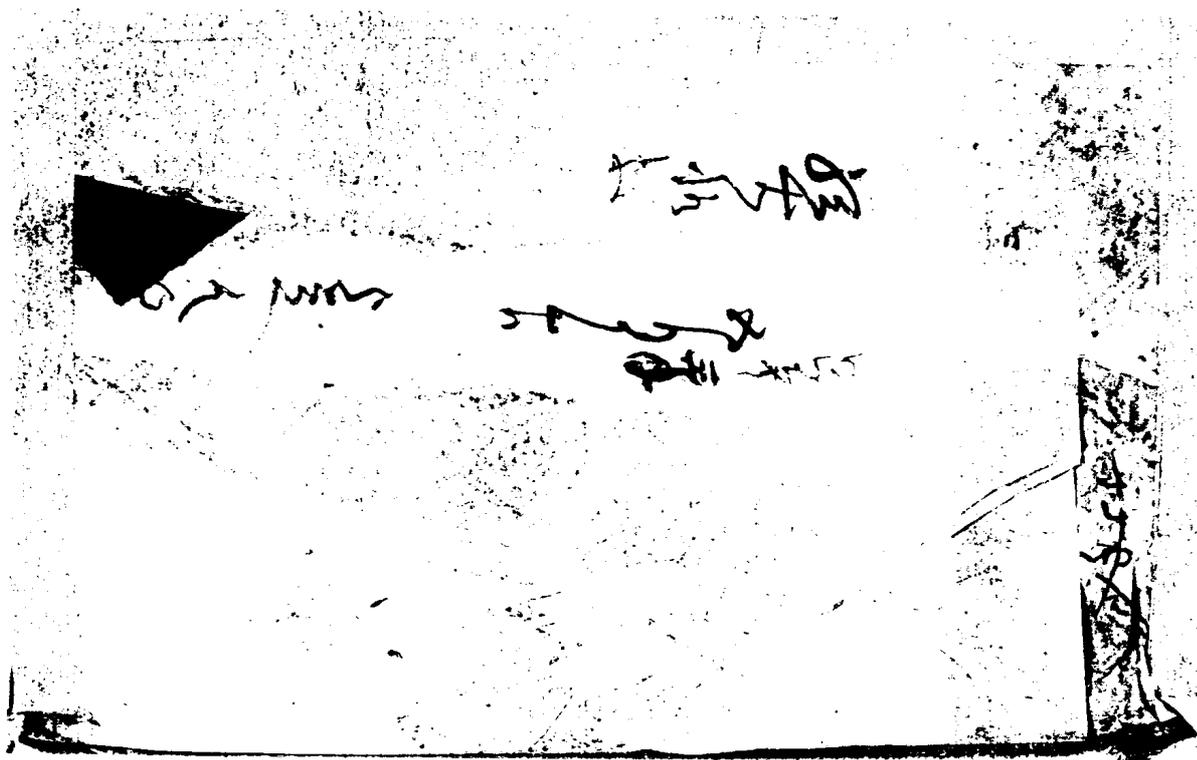
図三 第三種本 (東洋文庫蔵)



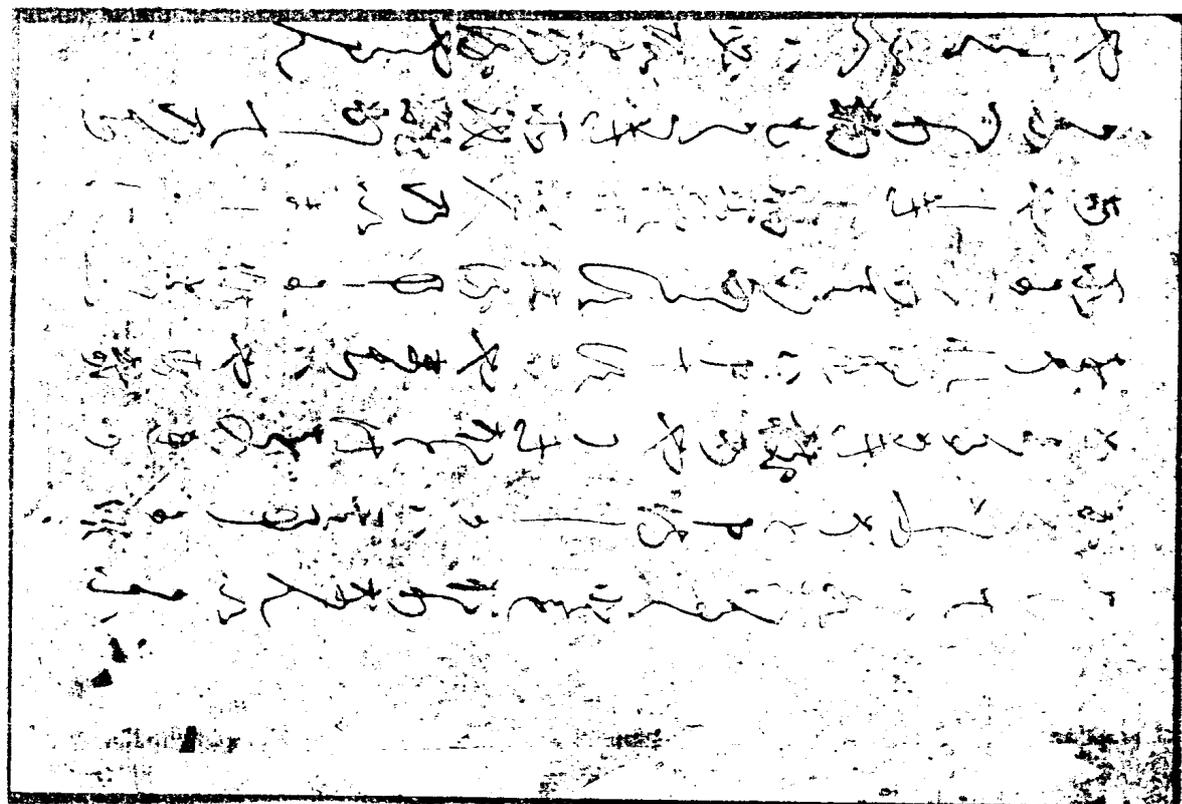
図六 蓬左文庫本 表紙



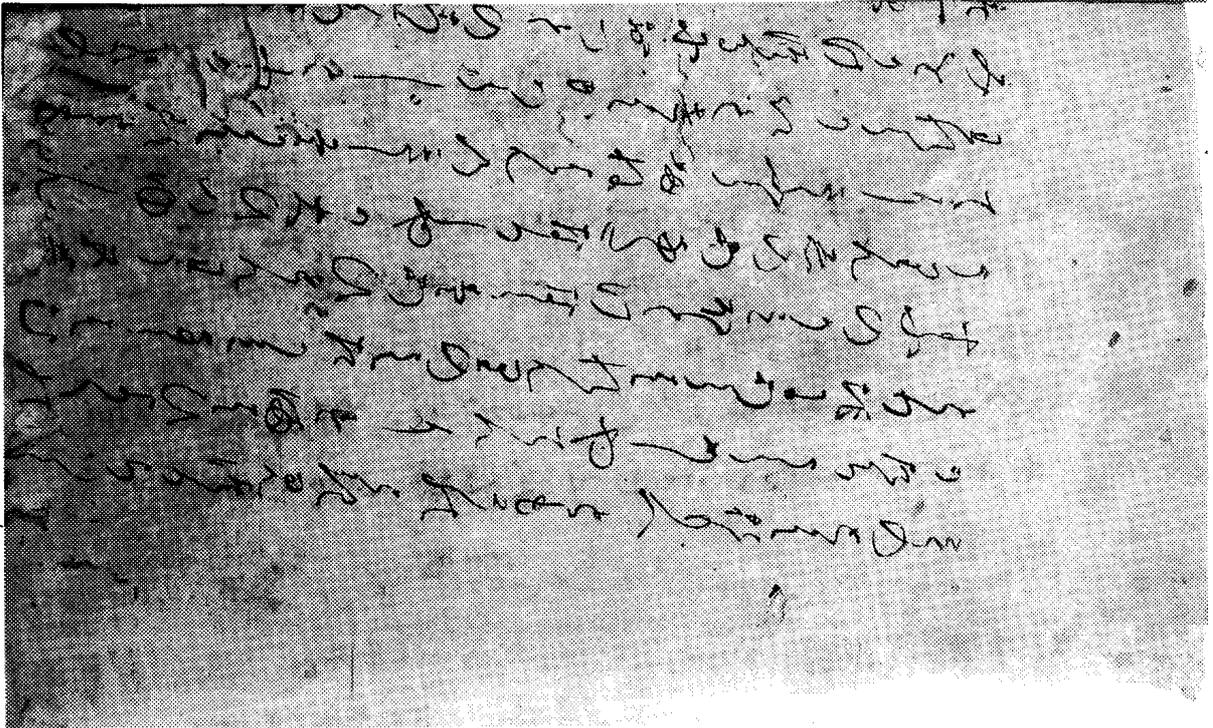
図五 京都府立総合資料館本 表紙



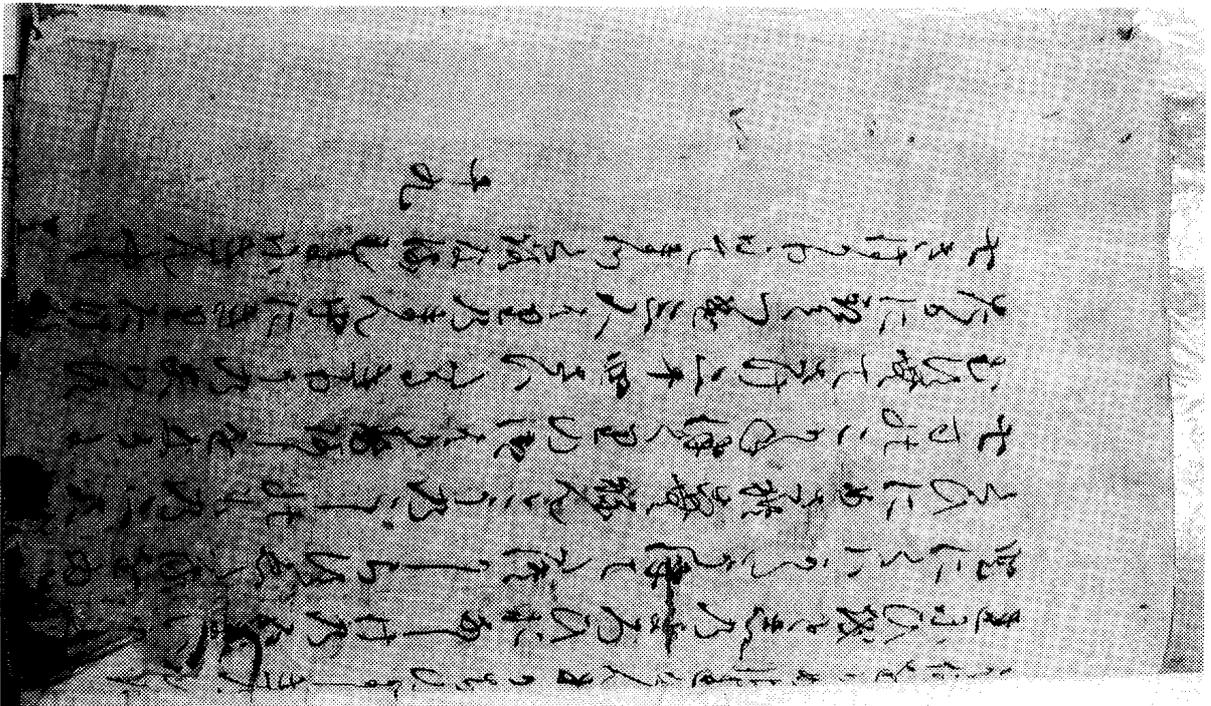
図八 同 表紙裏張の書状



図七 内閣文庫本(別二六ノ一) 表紙裏張の『徒然草』反古



図一〇 同「伏見常盤」



図九 新村出記念財団重山文庫本 表紙裏張の「丸九」